

- 6) 浅野俊夫(1983):サルの行動分析の基礎から。第21回日本医学会総会誌, 2731-2734。
- 7) 小嶋祥三(1983):霊長類による記憶の研究。岡野恒也編“霊長類心理学I” pp. 119-154. プレーン出版。
- 8) 小嶋祥三(1984):動物の記憶コードとその生理学的対応。早稲田心理学年報, 16, 29-35。
- 9) 松沢哲郎(1983):ニホンザル・チンパンジー・ヒトの姿勢の発達。霊長類の比較発達心理学①。発達, 16, 30-39。
- 10) 松沢哲郎(1983):つかむ, つまむ, ゆびさす— 霊長類の手と指のはたらき— 霊長類の比較発達心理学②。発達, 17, 23-33。
- 11) 松沢哲郎(1984):種間比較言語学 チンパンジーとヒトの色彩語彙の比較。言語生活, 385, 70-80。
- 自由摂食時間の場合。日本基礎心理学会(1983)。
- 6) 樋口義治・浅野俊夫:ニホンザル集団におけるトークン使用の形成。日本基礎心理学会(1983)。
- 7) 小嶋祥三:霊長類の合成音声の弁別。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 8) 小嶋祥三:霊長類の音の記憶に関する研究— 系列位置効果—。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 386。(1983)。
- 9) 松沢哲郎:チンパンジーの見えるの世界と視力。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 10) 長谷川芳典・松沢哲郎:野生ニホンザルにおける食物選択の戦略。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 11) 松沢哲郎:チンパンジーにおける「文法」の生成。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 390。(1983)。
- 12) 岩脇三良・松沢哲郎:ヒトとチンパンジーにおける図形および文字の認知。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 158。(1983)。
- 13) 林部敬吉・原政敏・辻敬一郎・松沢哲郎:ニホンザルの奥行視の発達に関する研究(3)・日本心理学会第47回大会, 発表論文集 201, (1983)。
- 14) 藤田和生:ニホンザルの observing behavior。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 15) 藤田和生:ニホンザルの弁別学習に及ぼす強化スケジュールの効果。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 394。(1983)。

## 論 文

- 1) Matsuzawa, T., Hasegawa, Y., Gotoh, S. & Wada, K. (1983): One-trial long-lasting food-aversion learning in wild Japanese monkeys (*Macaca fuscata*). *Behav. Neural Biol.*, 39, 155-159.
- 2) Fujita, K. (1983): Formation of the sameness-difference concept by Japanese monkeys from a small number of color stimuli. *J. Exp. Anal. Behav.*, 40, 289-300.

## 学会発表

- 1) 室伏靖子:概念の獲得。その比較心理学的考察。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 2) 浅野俊夫・吉久保真一:チンパンジーの条件性弁別:対面場面とキーボード場面の比較。日本動物心理学会第43回大会(1983)。
- 3) 浅野俊夫・樋口義治:ニホンザル野外群におけるオペラント行動(2)。動機づけ要因の検討。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 352。(1983)。
- 4) 樋口義治・浅野俊夫:ニホンザル野外群におけるオペラント行動(1)。負荷と社会的順位。日本心理学会第47回大会, 発表論文集 351。(1983)。
- 5) 浅野俊夫:閉鎖食物環境におけるFR反応:

## 社会研究部門

川村俊蔵・鈴木 晃・小山直樹・森 梅代

### 研究概要

- 1) ニホンザルの耕地回避学習

川村俊蔵・泉山茂之

国内では木曾研究林の整備に努力し、とくにしょうぶ平観察場開設準備を行った。従来よりつけているニホンザルの耕地回避学習実験では、これまでの木曾に加え、滋賀県朽木村での比較対照実験を行った。

- 2) ニホンザルの地域個体群の動態と群れのスペーシングに関する研究

鈴木 晃

上信越ニホンザル研究林，房総半島において，ニホンザルの地域個体群の土地利用，個体群動態，遊動におけるスペーシングの問題，オスの群れの離脱等に関する調査を継続しておこなっている。

- 3) ニホンザルのメスの順位と繁殖成功度に関する研究

小山直樹

30年間に嵐山で生まれた975頭のアカンボウについて，出産時期，性比，母親の年齢，出産間隔，順位などの項目をとりあげ，メスの順位と繁殖成功度との間の相関の有無等を調べている。

- 4) ニホンザルの社会的発達に関する研究

森 梅代

ニホンザルのコドモの社会的発達を遊び，子守り行動等の分析を通して進めている。特に子守り行動はその行動内容と参加個体の性，年齢との間に関連が見られるので，その点に注目して分析している。

- 5) スマトラにおけるリーフモンキー類の比較社会・比較行動学的研究

川村俊蔵

スマトラにおいて従来より継続中の *Presbytis melalophos* とその近縁種に関する比較社会・比較行動学的研究を行い，同じ研究を進行中のインドネシア研究者2名の指導も行った。また，従来進んでいないブタオザルの調査適地の発見をし，カリマンタンのグヌンバルン保護地と西マレーシアの予察も行った。

- 6) インドネシア・カリマンタンにおけるオランウータンの社会行動と社会構造に関する研究

鈴木 晃

カリマンタン・クタイ保護区に生息するオランウータンの観察を行った。30頭のオランウータンの森林内での付置構造を記録し，社会構造に関する討論を行った。

- 7) カリマンタンにおける各種霊長類の比較生態学的研究

鈴木 晃

カリマンタン・クタイ保護区及びその周辺地域に生息する9種類の霊長類の分布調査をし，それらの生態を観察した。

- 8) 類人猿の社会構造に関する比較研究

鈴木 晃

従来行ってきたアフリカに於る野生チンパンジーの社会と今年観察したオランウータンの社会とから，テナガザル，ゴリラを含めた類人猿の社会構造に関する比較検討を行っている。

- 9) カニクイザルの比較社会学的研究

小山直樹

1983年10月から1984年1月まで，スマトラのグノンメル山においてカニクイザルの社会行動を観察した。1980年当時のA，B2群が，1981年のA群の分裂によってA，B，Cの3群になっていた。全個体の識別下で，個体間でみられたさまざまな社会行動の頻度を取り，社会関係の把握を行うとともに，群間比較，社会変動等の分析を行った。

- 10) ゲラダヒヒにおける社会変動と性行動

森 梅代

ゲラダヒヒの野外調査により得られた2地域（森によるものとR. I. M. Dunbarによるもの）の資料を比較検討し，リーダー交代とそれに続いておきるメスの性行動（流産，発情など）の変化についての分析を行った。

- 11) 地域科学の方法論とその実際

鈴木 晃

1980-83年に行ってきた「房総半島の孤島性とその文化の研究」を報告書として刊行した。

## 総 説

- 1) 小山直樹(訳)(1983): 霊長類の社会行動 (N. チャルマース著)。培風館，東京。
- 2) 小山直樹(1984): マダガスカルワオキツネザル。アニマ，No. 132: 56-60。

## 論 文

- 1) 川村俊蔵・田中 進・泉山茂之(1983): 強煙火システムによる野生ニホンザルの耕地回避学習実験，1。哺乳類科学，45，53-70。

## 報告・その他

- 1) 鈴木 晃(1983): 房総半島の孤島性とその文化の研究。トヨタ財団助成研究報告書，140頁，房総半島の孤島性研究会。
- 2) Suzuki, A. (1984). Socio-ecological studies on the cercopithecoid primates in Kalimantan. The final report of surat Ijin Penelitian, No. 6428, LIPI.

- 3) 森 梅代(1984) : 自然史における男と女の性差 — 霊長類のメス。生活倶楽部, 第3号。

#### 学会発表

- 1) 小山直樹: マダガスカル, ベレンティにおけるワオキツネザルの性行動。第20回日本アフリカ学会(1983)。
- 2) 小山直樹: マダガスカルのワオキツネザルの社会行動。第30回日本生態学会(1983)。
- 3) 川村俊蔵・田中 進・泉山茂之: 木曾S群の分群行動列について。第28回プリマーテス研究会(1984)。
- 4) 鈴木 晃: カリマンタン・クタイ保護区のオランウータンの社会構造。第28回プリマーテス研究会(1984)。
- 5) 小山直樹: インドネシア, ゲノンメル山におけるカニクイザルの社会変動。第28回プリマーテス研究会(1984)。

#### 変異研究部門

野沢 謙・和田一雄・庄武孝義・峰沢 満

#### 研究概要

##### 1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野沢 謙・庄武孝義・川本 芳<sup>1)</sup>

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し, 群内, 群間の変異性を定量化する。現在までにニホンザル42群, 総個体数約2,500頭の血液試料について, 33種の蛋白の構造を支配する計36遺伝子座の検索を行ってきた。このデータをもとにして, 統計的検討を加え, 繁殖単位間の毎代の移出入率, 遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い, ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。

##### 2) *Macaca*属サルの系統的相互関係

野沢 謙・庄武孝義・川本 芳<sup>1)</sup>

ニホンザルを含む *Macaca* 属サル各種から採血を行い, 前項1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝学的変異性を定量化し, それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝的距離で表現し, それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それに

より種間の近縁関係, 分化時間の推定等を行う作業を目下続行中である。

##### 3) ニホンザルの先天的四肢奇形への遺伝的アプローチ

野沢 謙・峰沢 満

ニホンザルの数多くの餌付け群に多発する先天的四肢奇形が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。集団の奇形出現の家族集積性のデータから統計遺伝学的手法を用いて遺伝率の推定を行う他, 細胞遺伝学的手法を用いて奇形出現と染色体異常との関連の有無を明らかにする作業を行っている。交配実験は淡路島野猿公園の協力を得て現地で行っている他, 日本モンキーセンターとの共同研究として宮島から入れた奇形ザルを用いて本研究所においても続行している。

##### 4) 家畜化現象と家畜系統の研究

野沢 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝的野外調査によって, 家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と, 個々の家畜内で地域集団間の遺伝的分化の程度, 系統的相互関係の解明を行いつつある。

##### 5) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野沢 謙

1978年度の調査により入手した材料を用いてエチオピア中央高原に生息するゲラダヒヒの集団動態を遺伝学的に分析し, さらに, ドリル, マンドリルの資料を加え, ヒヒ類の遺伝的分化を定量化し, 論文化しつつある。

##### 6) ニホンザルの細胞遺伝学的研究

峰沢 満

ニホンザルの血液を培養, 染色体標本を作成する。これに各種のバンド染色を適用して標準核型を作成した。これに基づきニホンザルの各地の集団の染色体の変異性を把握しようとしている。

##### 7) 新世界ザルの遺伝学的研究

峰沢 満

リスザル, ヨザル, フサオマキザル, ダヌキータティ, クロホエザル, ムネアカタマリンの6種について遺伝的変異性(染色体変異および電気泳動法によって検索しうる遺伝的変異について)を定量化すべく作業を続けている。

##### 8) 志賀C群の秋期の食物利用調査

和田一雄

数年間継続中の調査であり, Seed trapによる

1) 学振奨励研究員